The Japan Society of Educational Sociology

学歴の機能とジェンダー

—高学歴主婦のライフスタイル分化に着目して—

○中西　祐子（お茶の水女子大学）　樋田大二郎（聖心女子大学）

1．はじめに

高学歴女性の全てが職業達成に向かうわけではない。専業主婦にとっての学歴の機能については、自身の階層的出自を示す象徴的機能（天野 1987）、配偶者選択のため（中山 1985）、よりよいライフスタイルのため（中山 1985）、子どもの教育のため（Duru-Bellat 1990）などが指摘されてきた。しかしながら、高学歴を有する専業主婦（高学歴主婦）が実際いかなる状況下にあるかを実証したものはわずかといってよい。その理由の一つは、従来の学歴研究が、男女を問わず、職業との関わりにおいて考察されてきたことにあると言える。

またジェンダー研究においても、従来女性の有職／無職、職種や労働形態の差異等が検討されることはあったが、もう一方の側である主婦は、「無職者」層として一枚岩的に扱われることがほとんどであった。そこで本研究では、高学歴主婦のライフスタイルに積極的に光を当てることによって、学歴の新たな機能を考察することを目的とする。

2．調査およびデータの概要

今日の女子高等教育は、特定の教育機関と対応する形で、学歴の象徴的機能を担う機関と道具的機能を担う機関とが混在しているといえる。本研究で扱うデータは、前者の教育機関の一つであるA女子大学の全卒業生（1951～1995 年卒）を対象に、A女子大学卒業生研究グループ（研究代表：武田京）が 1995 年に行った調査で得られたものである。調査の詳細は以下の通りである。

調査時期：1995 年 10～12 月
調査方法：質問紙調査（郵送法）
調査対象者：13,180 名
有効回答数： 6,753 名　（回収率 50.6%）

なお、A女子大学卒業生調査研究の推進にあたっては、同大学共同研究費（平成８・９年度）および同大学同窓会である宮代会の研究援助費の支給を受けた。本報告は、同共同研究の中間報告的位置を占めるものでもある。発表にあたり、データの使用を快諾して下さった共同研究者の方々にはこの場を借りて御礼申し上げます。

3．分析

a．調査対象者の諸属性

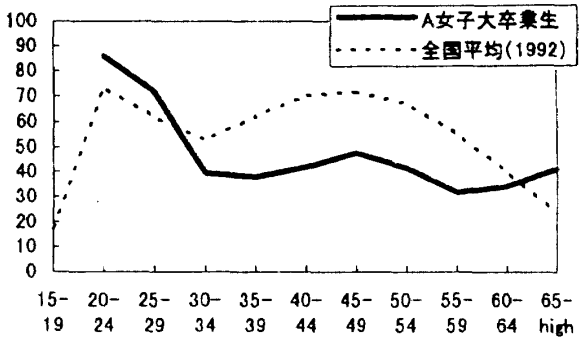
調査対象者の諸属性の内訳は次の通りであった（無回答含む）。世代別：20 代 25.4%、30 代 31.5%、40 代 22.5%、50 代 14.2%、60 代 5.3%。専業主婦率 43.3%。既婚率（離死別除く）66.9%。配偶者最終学歴４大卒以上 92.3%。配偶者職業：管理職 33.1%、医師・法曹・大学教員 16.9%、事務職 15.7%、会社経営 12.1%。子どもあり 58.8%。

b．現在までのライフコース

次に、調査対象者の大学卒業後から今日までのライフコースを、職業継続状況をもとに示す。

日本の女性の就業状況は、いわゆる「M字型」を描くことが知られている。これは日本女性の多数が、学卒後の就職－子育て期の離職－子育て終了後の再就職という中断再就職型の職業経歴を選択してきたことを反映したものである。

しかしながら、A女子大学の卒業生に関して言えば、このM字型就業は現われない。図１は、調査対象者の現在の就業状況をもとに、年齢別就業率を全国平均値とともに掲載したものであるが、全国平均の場合 30 歳代後半から 40 歳代にかけてみられる就業率の上昇が、A女子大学の場合みられず、むしろ「L字型」を描いていることが分かる。



＜図１　年齢階級別就業率＞

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

同様の傾向は、個人の職業経歴についてもみられた。大学卒業直後から現在までの職業経歴については、多種多様なパターンが見られたが、それらを分類したところ、①継続就業、②中途就職、③中断再就職、④再就職後退職、⑤初期就業後退職、⑥未就業の6グループに分けることができた（詳しい分類方法については当日配布する）。前者の3形態は現在有職者（家業手伝い、パートタイム、自宅で仕事など、収入を伴うあらゆる労働形態を含む）、後者の3形態は無職者である。各グループの占有率をみると、中断再就職経験者（③+④）が少ないこと、学卒後の短期間のみ就業した者（⑤）や全く就業経験ない者（⑥）が比較的多いことが特徴である。なお、コーホート別にみると、未就業者は高年齢層に多く、低年齢層になるにつれ、それと代わるように初期就業後退職者が増加するという特徴が見られた。

c．現在のライフスタイル

それでは、無職者や退職者・未就業者とカテゴライズされる者たちは、いったい何をしているのか。有職者がその職業やフルタイム／パートタイムといった就業形態によって分類できるように、専業主婦のライフスタイルもいくつかに分類することができると考えられる。

現在の日常生活の活動内容を抽出するために、18の項目を設け、活動したことのある項目全てを選択してもらった。取り上げた項目は、育児、宗教活動、家事、社会教育講座、仕事、カルチャーセンター教養講座、PTA、通信教育・大学等での勉強、幼稚園等のサークル、資格取得学習、子ども会世話人、スポーツクラブ、ボランティア、ピアノ・華道等の習いごと、消費者運動・環境運動等、手芸・絵画創作、母校関係活動である。サンプル全体の活動頻度の上位6位は①家事、②仕事、③育児、④スポーツクラブ、⑤手芸・絵画、⑥習いごとであった。

まず、現在の就労形態ごとに活動頻度の上位6位を集計したところ、専業主婦の場合は「手芸・絵画」が第3位に、第5位に「PTA活動」が入るのが特徴である。またフルタイム就業者は、「仕事」が第1位に、「資格取得学習」が第5位に入ることが、パートタイム就業者は「ボランティア」が第6位に入ることが特徴であった。高学歴女性のライフスタイルは、本人の就業形態からの影響を受けていることがここからも明らかである。

しかしながら「仕事をする／しない」自体も一つの選択肢である。そこで、これらたくさんある日常活動の中から、何を選択しているかをもとに、高学歴女性のライフスタイルを分類してみよう。

まず先にあげた18項目の活動経験者をそれぞれの項目ごとに抽出し、各集団が他項目をどの程度選択しているかを算出した。集団ごとに他項目活動率は異なり、たとえば「資格取得学習」をしたと答えた者はサンプル全体では23.5%であるが、「大学等で勉強した」者の中では42.9%に上り、「PTA活動をした」者の中では18.7%にとどまる。

次に、各項目ごとにその活動を選択した比率が高い母集団の上位2位を抽出した（表1）ところ、活動項目にはある程度の類似性がみられることが分かった。類似性をもとに活動のグループ分けをすると、①子どもを通じたネットワーク活動（PTA活動、幼稚園サークル、子ども会世話）、②学習活動（資格取得学習、大学等勉強、カルチャーセンター）、③社会活動（消費者活動、手作りサークル、社会教育講座、ボランティア、宗教活動）である。なお、子どもの世話や家事は第1グループと、仕事は第2グループとの類似性がみられた。

項目	第1位	第2位
子どもの世話	ＰＴＡ	幼稚園ｻｰｸﾙ
宗教活動	消費者活動	ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ
家事	ＰＴＡ	子ども会世話
社会教育	子ども会世話	消費者活動
仕事	資格取得学習	大学等勉強
ｶﾙﾁｬｰｾﾝﾀｰ	社会教育	大学等勉強
ＰＴＡ	幼稚園ｻｰｸﾙ	子ども会世話
大学等勉強	資格取得学習	ｶﾙﾁｬｰｾﾝﾀｰ
幼稚園ｻｰｸﾙ	ＰＴＡ	子ども会世話
資格取得学習	大学等勉強	ｶﾙﾁｬｰｾﾝﾀｰ
子ども会世話	ＰＴＡ	幼稚園ｻｰｸﾙ
ｽﾎﾟｰﾂｸﾗﾌﾞ	ｶﾙﾁｬｰｾﾝﾀｰ	資格取得学習
ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ	消費者活動	宗教活動
習いごと	ｶﾙﾁｬｰｾﾝﾀｰ	資格取得学習
消費者活動	手作りｻｰｸﾙ	社会教育
手作りｻｰｸﾙ	消費者活動	社会教育
手芸・絵画	幼稚園ｻｰｸﾙ	母校関係活動
母校関係活動	ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ	宗教活動

＜表1　項目別活動率の高い集団＞

4．考察

以上のように高学歴女性は、さまざまなライフスタイルを営んでおり、とりわけ高学歴主婦に対する学歴の機能を考察する際には、これら職業達成以外の諸活動との関連を分析していくことが重要である。それは従来の学歴研究においては見落とされがちであったが、まぎれもない学歴の機能の一側面を示すものと考えられる。

NII-Electronic Library Service